



一貫コース通信

私が考える免疫の認識

コロナウイルス感染症のカテゴリーが2類から5類に移行し約40日が経過しましたが、教育活動の制約が緩和されたのを機に、様々な活動が戻りつつあります。この間に目に映った光景から少しコロナ禍の事を振り返ってみたいと考え今稿を綴ります。

総体の県北予選では幾つかの種目の応援に行きましたが、本校の運動系クラブの活躍は素晴らしく、殆どのクラブは県大会進出を果たしました。その中の一コマですが、ある種目の試合で目にしたのは、試合の最中マスクをしてプレーに臨んでいた選手の姿でした。勿論、本校の選手ではありませんでしたが、倒れはしないかと心配しながら試合の行方を見守りました。また、同時にこの時期は県北に在る総ての中学校を訪問する事にはしているのですが、各中学校の様子からこの地域の現状を考える機会にもなりました。マスク姿の割合等から、実態はコロナ禍以前と比較して進んでいないのだと認識した次第です。

“安全で安心”のキーワードは、教育現場に因らず生活を営む上で特に大切である事は言うまでも有りません。しかし、現在は“安全・安心”をも、氾濫する情報から程度の差はあれ、自分で判断しなければならない時代なのだと考えています。感染症の予防ともなれば原因となる病原菌の体内への侵入を拒まなければなりません。その意味でマスクは解り易い防衛策の一つなのだと思います。しかし、一端侵入を許したら本来私達に備わっている、自然治癒力に頑張っただけで貫うしかないので。医療は飽くまでも補助的手段なのだと思います。自然治癒力に包含されるかどうか解りませんが、大切な要素に免疫があります。この免疫システムの解明に寄与したヒトが、利根川進博士(日本人初のノーベル医学生理学賞受賞者です)です。利根川先生は免疫が様々な病原菌に対応するメカニズムを、科学的に解明しました。

理解を深める為に少しだけ、分子生物学の主なトピックを時系列でまとめてみます。1953年にワトソンとクリック博士がDNAの二重らせん構造を解明しました。次にセントラルドグマ。どうやってタンパク質が出来て来るかが1958年に提唱され、mRNAとtRNAが関係してタンパク質が造られる事が解明されます。続く1975年に免疫に絡む抗体の発見が成されます。抗体は北里柴三郎博士が先駆者ですが、ケラーとミルスタインに因って人為的にモノクローナル抗体の合成が成功します。ほぼ同時期に京都大学の利根川博士は、抗体が非常に多様性の在る事の仕組み(可変領域の組み換えの自在性に因る事)を解明したのです。これと相前後し、1973年以後は遺伝子組み換えが可能と成り、1985年にはキャリー・マリス博士に因ってPCR(ポリメラーゼ・チェーン・リアクション)が確立され、遺伝子の人為的増殖が可能になりました。このお陰で、現在、検査が容易に行われているのです。



何故この様な事を綴ったのか…? その訳ですが、それは、現在の医療技術には、この様な確たる根拠の積み上げの歴史が在る事を理解して戴きたいと思ったためです。

つまり、私達は何を信じるかも、ある意味、自分に課せられている訳です。マスクの着用も自分の信じるモノで自己決定しているのだと思います。話は変わりますが、私は、現

在第 6 回のワクチン接種待ちの状態に在ります。前回の稿で自国ワクチンの製造が叶わなかった事への嘆きを記しましたが、ワクチン(ひいては免疫)への信頼はこの事とは別です。言うまでもなく、ワクチンは抗体を創る上でとても大切なモノです。今後もコロナウイルスはその性質上変異を繰り返し、人類との攻防を続けて行く筈です。それを考えると、最も優れた防御策は現代医療を信じ、それに沿った対応をする事なのだと強く思っています。その事で、周囲の風景がより快適な方向に行くのではないのでしょうか。